

聞名仏教

第105号
(発行日)

2019年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

不思議の中の生と死

かつてあるお方の葬儀を行ったとき、ご主人の遺骨を前にした喪主の奥さんが「わけがわからなくなった」とおっしゃったのがとても気になりました。

しかし考えてみれば、「わけがわからなくなった」ことの方が、葬儀の時に多くの人が「とうとう行ってしまった」「旅だった」というような感想よりは、親しい人の死に直面したこのご婦人の感じの方がずっと奥が深いと思うのです。何十年と一緒に生きてきた人があつという間に白いお骨に変わるといふことは、決して当たり前のことではなくて、「理解しがたい」ことではないでしょうか。

ただしかしながら、「理解しがたいこと」は人の死にかぎらず、人としてオギャーと生まれることも同じだと思ふし、もっと広げれ

ば今ここに何か(人)として生きていくこと事態が不思議としか言い様のないものです。生まれることも不思議であれば生きていくことも不思議であり死ぬことも不思議です。

こういう感覚は幼い時には何となく感じていたように思います。ただ、だんだん長じるにしたがつていつのまにか何事も当たり前になり、なんとも感じなくなつていったのです。それは生の事実から実感的にだんだん離れていったのではないのでしょうか。

幼い頃はトンボが飛んでいることも、レンゲの花が咲いていることも、アリの動き回っていることにも感動していたように思いますが。大人になると、特別なことしか驚かなくなりました。二十歳前のことだつたと思います。カラオケテレビを見て不思議だなあーと感

じたりガガーリンが宇宙空間に出て地球を回って「地球は青かった」と語ったニュースを見て不思議さを感じたりしましたが、これらを「不思議」と感じたのはどこまでも非日常的なできごとに接してのことであつて、日常的事象に接しては特に感動も不思議も経験してこなかつたように思います。

しかし本当は日常生活の中で不思議はいっぱいあります。目が物を見ていくことも、音楽を聞いて「美しい」と感じることも、庭に花が咲いたり、虫が地面を這つたり、犬の存在も猫の存在も不思議の塊であります。

ただ問題は「生の不思議」「死の不思議」に直面して、「人生は不可解なり」として華厳の滝に十六歳で身を投げた藤村操や、「わけがわからなくなった」といつたその婦人のように、不可解や不思議なことにぶつかつて、そこに不可解である

という不気味さに囲まれたような感じになる、いわば「わけのわからない」ことの中にいる自分になんともいつてみようのない不安を感じる。そういうところに問題があると思ひます。

むしろ不可解であり不思議である神秘性に尊い働きを感じ、その力によって「生かされている」「自分を感ずる、そこに大きな違いがあると思ひます。

不可思議というか神秘とどうか、人間に計り知ることのできない働き、それを感ずる、そういう働きに包まれている、あるいは生かされているという有り難さを感じ、そこに安らぎと喜びを感ずる。それが宗教的な感動の原初的な姿だと思ひます。

よく言われるようにアミダ仏に「生かされている」といふのは、不可思議な働きが万物に行き渡つていて、今この自己に貫いていふことを感ずることでありましょう。煩惱具足の凡夫の私にはそのように感ずるのはなにかおかしなものであつても、それは生きていく根も

とに連なる感覚であるように
に思います。
佐々木蓮磨師の『法味寸
言』に

一、今、生きていることが
一大不思議。

一、今、現に生きている事
実（ありのまま）が
一大不思議。このほか
に仏なし。

とあります。

もしそういう働きが不気
味に感じたり不安になると
するなら、それはそういう
不可思議な働きの真相に触
れていないからでありまし
よう。
(了)

〈遠方法話予定〉

○六月二十八日。大阪・難波別院。
午後一時半。法話

○七月五日。名古屋市。高畑会館。
午前。法話・座談

○七月十七日から十九日。福井別
院。法話・座談。午後七時「心の
講座」

○九月十四日。福井別院・午前。
法話・座談。

○九月十七日。高畑会館。午前。
法話・座談。

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

諸善万行ことごとく

(和讃問答)

諸善万行ことごとく

至心発願せるゆえに

往生浄土の方便の

善とならぬはなかりけ

り

(浄土和讃)

* * *

(現代語訳) 諸善万行は本
来、聖道門の行である。け
れども、この行によって浄
土往生を願わせたいと、ア
ミダ仏が至心発願の誓い

(第十九願)をお立てくだ
さったので、浄土往生のた
めの方便の善とならないも
のはなかったのである。

なお十九願の願文は

「たとい我、仏を得んに、
十方衆生、菩提心を発し、
もろもろの功德を修して、
心を至し願を發して我が国
に生まれんと欲わん。寿終
わる時に臨んで、たとい大
衆と圍繞してその人の前に
現ぜずんば、正覚を取らじ」

* * *

D 「アミダ仏が第十九願を
建てられたのは、諸善諸行
を行って、自分の行く諸善
によって浄土に往生しよう
と願い、修行をしていくも
のを浄土に導いていこうと
方便された、ですから諸善
諸行がことごとく方便の善
となるのだと仰せられるの
です」

N 「人間の側からのさまざま
まな修行でもってアミダの
浄土に生まれようとするな
らば、諸善万行は浄土に生
まれる道を開く善にならし
めたいという願なのです
ね」

D 「ええそうです。この世
で悟りを開こうと諸善を行
じていく人、あるいは人生
のなかで真実にあいたい、
真実な人間になりたい、助
かりたいと思つて、自分の
力で願わしい自分にしてい
こうと努力していこうとす
る人が、さまざま善でも
つて浄土に生まれたいと願

つていくなら、死に際して
仏菩薩が迎えに来るであろ
うと誓われた願が十九願で
す」

N 「十九願は自らの修行に
よつて救いを求める人たち
に應じて建てられ、そうい
う人に諸善諸行を浄土に生
まれる行として修していく
なら臨終に迎え取ろうとの
願ですね」

D 「ええそうです。そうい
う諸善諸行を行うことをた
のみにしている人の願いに
応じて仮に建てられた願で
す。ですから方便なのです」

N 「仮に建てられたという
のはどうしてですか」

D 「実は諸善諸行によつて
は真実の浄土に往生するこ
とはできないということ
表しています。しかし、そ
ういう者もその諸善諸行に
よつて自らの限界を知らし
め、アミダ仏をたのませよ
うとして仮に建てられたの
が十九願です。そこにそう
いう者を見捨てず浄土に導
いていこうとのアミダの慈
悲が表されています」

N 「諸善諸行で真実の浄土
に生まれること、もつとい
えば真実にあうこと、救わ

れることはできないのです
ね。なぜですか」

D 「私たち凡夫が諸善諸行
を行う主体が自我だからで
す。たとえ善を行なつても、
自我の心で真実にあうこと
はできないからです」

N 「にもかかわらず、浄土
に導いていこうとされたの
はどうしてですか」

D 「自我心を離れないまま
に諸善諸行を行う者を臨終
の時に浄土に迎えとろうと
表すことによつて、それを
縁として自らの能力の限界
を知らしめ浄土に導こうと
の大悲です。自らなす諸善
諸行で浄土に生まれたいと
願つて修する者がいてどこ
までも自力執心のやまぬも
のを見捨てず浄土に導いて
いこうと方便されたので
す」

N 「方便とは」
D 「真実へと導く教育的手
段のことです」
N 「十九願は方便の願なの
ですね」

D 「それは十八願に入れし
めるために仮にもうけられ
た道ですから十八願にいた
らしめる方便の願です」

生前葬について

N 「なぜ十八願だ

けでは不十分なのですか」

D 「十八願では救いが不十分というのではありません。ただ自分の修行でもってこの世で悟ろうとする人はどこまでも自分の能力を頼みにする気持ちが抜けませんから、阿弥陀仏の慈悲の力だけで救うという十八願を聞いてもアミダ仏に身をゆだねることができないのです。人間は修行している人だけでなく、自己信頼の気持ちというか高ぶっているというか、自我心が強いのです。ですからそういう自我心では十八願を受け入れることが難しいので、十九願を説いて、自我心で自分を助けようとして諸善諸行を行う者を十八願にまで導こうとされるのです」

N 「問題なのは自我心だと言われますが、それはどうしてなのでしょう」

D 「自分で自分をなんとかしようとするのは善いようですが、しかしそれは自分の理想や願望を自分の努力でもって勝ち取って自分を

高みにあげようという自我心が根にあります。それはどこまでも自我が主体です。たとえ仏の悟りを開きたいと願って修行をしてもその根にある

ものは自分を自分にとって望ましい自分にしたという自我心が主になりやすいのです。ドカンと一発悟りを開いて自分に望ましい自分になりたいという自我拡大の野心がつきまとうのです。それが凡夫の自我心です。ですから自力の修行には自我心がつきまといまうので真実にあえないといえましょう」

N 「でも自我心が否定されることは容易ではありませんね」

D 「ええ、ですから方便が必要なのです。その方便の願が十九願です。自我心がありながらも諸善諸行を行って浄土に生まれようとする者を十八願に導いていこうとされるのが十九願でありましょう」

(了)

先日、あるお方の質問に答えよ、ということ。他紙に小文を書きました。その質問とは

「私は老齢になり、葬儀のことを考えています。最近生前葬のあることを知りました。生前中にお世話になった方々や知人にお別れを生きているときに直接に述べたいのと、葬儀の負担を息子にかけたくないので、私も生前葬をしたいけれども、していいものかどうか迷っている」

この質問が出てくる背景に現代、葬儀や法事はどういう意義があるのか、費用がそこそこかかる割にはそれをしなければならぬほどの意味を感じない、という事情があると思えます。

けれども世間の手前しなくて周囲からか亡き人からか、何らかのバッシングなりバチなりにあうのでは

なからるかということ、葬儀や法事を行ってきた人もあろうと思えます。

以前と比べて親族や世間からのプレッシャーが少なくなつた分、お互いの人間関係が薄くなつてきた現代、葬儀・法事をしない人が増えてきているのも事実です。

人がいわゆる仏事（広く言えば宗教儀礼）をしなくなつたらどうなるのか、これはまだはっきりとその影響なり結果なりが露わとなつていませんのでこれから課題になりましょうが、とりあえず以下は生前葬についての小文を書いてみました。

(ご質問のお方に対し)

亡くなる前に知り合ひの方々にご本人から直接別れを告げたい、また子供に葬儀の負担をかけたくない、そのために生前に葬儀をしたいとのこと、おっしゃるお気持ちは理解できます。

ただここで生前葬といわれるのは、死に先だつての単なる「無宗教の告別式」いわゆる「お別れ会」ではなく、宗教儀礼を生前に行いたいということであり、実際に死んだ時は葬儀はしないということですね。

ただ葬儀は本来死者儀礼ですから生前に葬儀を行うというのは、参列者もご本人も何か違和感を感じるのではないかと思えます。いかがでしょうか。たまに生前葬をされる方がいますが、それは、本人にまったく身寄りがなく、葬儀をしてくれる人もなく、参列者にお礼の言葉を述べてくれる人もいない場合、です。

私の師でもありました木村無相師は独身で身寄りがありませんでしたので、親しくしていた住職を迎え生前葬をなさいました。亡くなつた後で皆さんにと、死亡通知のハガキまで用意しておられました。

大体葬儀というものはご本人の行うものではなく、遺族の方が行うものですか、葬儀をするかしないか、あるいはどういう葬儀をす

るかを決めるのは遺族の方
ご自身の事柄であります。
もつともあらかじめ弔われ

るご本人が葬儀の内容にご
自分の希望を伝えたり葬儀
費用を用意したりすること
はできません。そういう
ことで息子さんに「生前葬
で済ませたから葬儀はしな
くてよい」とは言えますが、
葬儀は息子さんが為される
ことです。そう伝えて
いても現実にお母さんの死
に直面した時「やはり自分
は母の葬儀をしたい」と思
って葬儀をされるかも知れ
ません。

を通して仏教の教えに出遇
っていたためでありま
す。

夫の死を経験したあるご
婦人が、葬式の時「何が何
だかわからなくなった」と
私にいわれたことがあります。
それは、何十年も一緒
に過ごしてきた夫が急にお
骨になって目の前にある、
「一体人生で何なのか」(生
きてるといふのは何なの
か)という謎というか不可
解さにおぼつかられたからだ
と思います。

人にとって死は「生きて
いが死なねばならない」と
いう人生最大の不条理であ
り、そういう中で葬儀など
の仏事を通して死を身近に
感じ、手を合わせてナムア
ミダブツとお念仏を申すと
ころに、アミダ仏(はかり
ない真実)との出遇いに導
かれ、不可解な人生に豊か
な意味と方向が与えられる
縁ともなり得ましよう。葬
儀は決して無意味な習俗で
はありません。

(了)

「松並松五郎念佛語録」より

○大事な空気も、吸わねば
死ぬ、死ぬと思つて呼吸し
ているのではない。吸うば
かりではならぬ。たまには
はき出さねばならぬと、ソ
ロバンはじいて、はき出し
ているのではない。自然に吸
うて、自然にはき出して、
生かされている。

お念仏もその通り。六字
のおいわれを聞いて、自然
に称名となつて、口から聞
えて下さる。その一番大事
な空気も、「ただ」であり
ます。お念仏も「仏」の願
心よりい出て、「私」を徹
して、この口に現れて、ク
ダサル苦勞は親にさせ、成
就して、仕上げの南無阿弥
陀仏を頂くばかり。この南
無阿弥陀仏も「ただ」であ
ります。これはこれは何と
したことが、と驚くばかり。

(松並語録より)

*

(息をするのは自然に空気
をすうて自然に吐いてい
る。まことに自然であつて
我が計らいではない。そし

てそれによつて生きてい
るのであるから生かされて
るのである。寝ている間も
自然に息してる。自分の思
い計らいはない。

それとお念仏は同じであ
ると松並さんは仰せられ
る。自然に息をすつて吐い
ているように、お念仏も自
然に称えられ耳に聞こえて
くださるといわれる。

ここでお念仏が自然に出
入りして下さるとまで松並
さんが仰るのはよほど称名
念仏が身について居られる
から言えるのであろう。

昔の先達は「お念仏はま
ず癖になりなさい、しかし
癖になつてはいけない」と
言われた。一見矛盾するよ
うな言葉であるが、それは
まず分かつても分からなく
てもお念仏が日頃自然に出
るほどに癖になりなさいと
いわれ、しかしそのお念仏

は単なる癖の念仏に終わる
のではなくて、お念仏はア
ミダ仏がご自身を表して
「汝のありべのまま浄土
に連れて行く」との大悲の

お心の表れであることを知
(信知)ることが大事であ
ると言われるのでありまし
よう。

まさに一声の念仏はアミ
ダ仏が私に代わつて仏にな
る困難な修行をしてくださ
り、仏となるタネを全部成
就して南無阿弥陀仏になつ
て知らせ与えてくださる恵
みであります。不可思議な
有難い力であります。

身体を生かす空気がタダ
なら、心を生かす本願成就
の名号もタダ。このタダの
名号を口に称えさせられ耳
に聞かされ、「汝を仏にす
るタネは全て弥陀が用意し
た、そのままこの南無阿弥
陀仏で引き受ける」と仰せ
くださる。「これは何とし
たことか」と驚くばかり、
仰ぐばかり、との仰せであ
ります。

(了)

